

怪盗アンデット ～The Regeneration～

リユーヤ

西暦、1366年9月13日、午後4時27分。この時間、ある男が警察隊の手によって捕獲された。男は世界を混乱させていた有名な大泥棒で、通称「トリックスター」と呼ばれていた。本名「ハデス・ロキ」、成人男性。年齢不明、国籍不明。初犯からかれこれ12年間、怪盗として世界各地でありとあらゆるお宝を盗み続け、彼一人の犯行での被害総額は約75億L（ライト）。最後の盗みの途中でヘマをしてしまい、兵器を所持した軍隊150人と警察隊400人に囲まれて袋のねずみに、あえなく御用。暴れる姿に見かねた何者かが命令を出して麻酔薬を数本注射、眠ってしまっている間に収容所へ厳重送還。拘束衣と何10本もの拘束具で肉体の自由を奪われた姿で裁判にかけられ、判決は死刑宣告。一言だけ言葉を発することが許され、ただの盗みで死刑は正当な法律なのかと弁明したが、被害金額があまりにも巨額過ぎ、加えて今まで自分の逮捕に何百人もの人間が犠牲になっていることも含めての死刑判決だと言いくるめられ、裁判は強制的に閉廷した。

1366年9月18日、午前11時7分、死刑囚「ハデス・ロキ」の死刑が執行された。死刑内容は吊るし首。逮捕された時と何一つ変わる事のない姿で死刑台に上げられた彼は、警官の手を借りることで今までに何人もぶら下がって呪いが込められていると噂になっている荒縄を首に結ばれ、足場から落下した。

午前11時15分、怪盗トリックスター、ハデス・ロキの死亡が確認。

午後12時3分、死刑執行所裏の収容所所有の墓地にて埋葬完了。
全ての事件は、これにて幕を閉じた。

1368年、5月28日、事件発生。

2年前に埋葬された怪盗トリックスターの墓地が、何者かによって掘り返され墓石の下に眠っていたハデス・ロキの死体が消失。

2年も土の中に埋められていた死体を持ち出した犯人の目的、意図、そして犯人像が全く掴めないまま捜査は難航した。その後の捜査によりハッキリとしたことがたった一つだけある。ハデス・ロキの墓は、検証の結果何者かが意図的に外から掘り返したのではなく、まるでモグラかミミズのように地面から這い出して来るような穴であったことが確認された。

まるで死んだ人間が蘇ったかのような出来過ぎた話を、最初は誰も信じなかった。

同年、7月19日、捜査は急展開を見せられた。

美術館より展示されていた「黄金王の仮面」（約2000万L相当）が何者かによって盗まれる事件が発生した。捜査を重ねてゆくと、近隣で怪しい人影を見たという数人の目撃証言を元に警察はモンタージュを作成。

結果、全ての証言を含めて作成されたモンタージュ写真は、2か月前に姿を消したあのハデス・ロキの顔と酷似したものだ。何かの間違いではないかと当初は不思議にされていたが、翌日全ての真相が解かれることとなった。

7月20日、怪盗トリックスター、「ハデス・ロキ」の存在を確認。

事件発生から翌日、盗まれた黄金王の仮面を所持したハデス・ロキが、自らの足で警察へ出頭したのだ。仮面を押収したのち、ハデス・ロキは再度逮捕、初逮捕の時と同様に拘束衣を纏った状態で再度裁判が開廷。判決は無論死刑。なぜ自分がここにいる、なぜ生きてこうやって裁判を受けなしているのか尋問されたが、ハデス・ロキは一切何も口を開こうとはしなかった。

7月23日、午後3時4分、ハデス・ロキの死刑が再執行された。今度の死刑は貼り付けからの銃殺刑。壁に何本ものベルトで固定されたハデス・ロキは、担当責任者の号令により数十発の弾丸を全身に命中させられ、午後3時7分、完全な死亡を確認。

午後3時46分、墓地にて再び埋葬された。

1370年9月16日、世界に震撼走る。

2年前に埋葬されたハデ・ロキの死体が、再び墓地から消失した。調べた結果は、前回と同様に内側からゾンビのように這い出して来るような痕跡が認められた。

不気味に思いながらも捜査を進めるが、死体の行方は見つからなかった。

1371年3月28日、国際的大手企業の会長自宅金庫より、保管されていた会社の営業売上金約2億Lが盗まれた。金庫の中には1枚のカードが残されており、カードの文字を読んだ全ての警察官が恐怖し、腰を抜かした。

「金庫内の現金、確かに頂戴いたしました。領収書を同封します。」

黒いプラスチックカードに赤い血のような文字で、そう書かれていた。

あいつは生きていた。我々警察に、死んでいることを2度も見せているのに、まるで墓の中から脱獄する様に姿を消し、再び世界のどこかで盗みを働いているのだ。

ついに男は伝説となった。

幾度となく命を落とそうと、決してこの世から消えてしまう事の出来ない男。

男の名は「ハデス・ロキ」。

またの名を、

「怪盗 アンデット」

1642年、7月22日

盗賊の都「ニブルヘイム」。40年前までこの土地は巨大な権力で支配されていた王都だった。しかし住民衆の大反乱により国は滅亡、この国は数日もたたない内に廃都と化してしまった。それ以降個々に住む者は皆盗むか奪うかして生きるための生活物資を手に入れる方法を取るしかなかった。

廃都はしだいに盗人や外を大手を振って歩けないような人間どもが自然と住みだし、いつの間にか全世界の犯罪者達がこぞって集まるしだいとなり、この街は「盗賊の都」と呼ばれるようになったのだ。世界地図からもこの都は抹消され、警察や軍隊でさえ侵入することが禁止されている究極の無法地帯と化している。

この街では何でも好き放題やりたい放題が認められている。盗むことも、商う事も、野垂れ死ぬも、盗品を金に換えるのも、危険なブツや薬を売るのも、殺すのも、何もかも自由。

このように汚く、カビ臭い土地ではトラブルだって日常茶飯事だ。今日も街の片隅で細々と営業しているこの店でも、トラブルが起きようとしている。

ここはこの街では有名でもなんでもない、ただの寂れた小さなメシ屋である。古くから営業している老舗で、売り上げが高いわけでもないがこの店の味を求めて訪ねてくるリピーターも多いのが店の自慢だ。この店の主人はもともとこの近くで戦争が繰り返されていた時代の敗残兵で、戦争の真ただ中に命が惜しくなって命からがらここまで逃げ伸び、現在にいたっているわけなのだ。ここに訪れる客はどうしようもない犯罪者ばかりだったが、金さえしっかり払ってくれさえすれば特に咎める気なんてありゃしない。この街で店を構えている人間は一様に前歴に『元』がつく様な連中ばかりで、そのほとんどがどうしようもない理由でこの街に逃げ込んできた奴ばかりなのだ。

そんな曰くしかないこの飯屋は、今日も賑わっている。身体のデカイ奴も小さい奴も、男も女も入り混じって昼間っから酒をカッ喰らいながら、盗んだ金品を売っぱらって出来た金で豪勢な飯を食っている。

そんな店の一角、一番隅にあるテーブルに重なっている皿の数は異常だ。注文した矢先に食べ尽くされ、食いかすやソースまで丹念に舐め取られて洗ったかのようにピカピカに光っている皿がロッキー山脈のような高さに積み重なっている。この全ての皿に載っていた料理を食べ尽くした男は今、テーブルのわずかな隙間に両足を重ね着ている服と全く同色の黒い帽子を顔に乗けて寝むり呆けている。

そこのテーブルへ、人には自慢できない様なサービス代行業をしているうちにここへ流されてきたアルバイトの店員が、アップルパイの盛り付けられた皿を片手にオズオズと近づいてきた。皿の山が崩れないように、慎重に客の元まで近づくことに成功すると、耳元でささやくような小さい声で話しかけた。

「あの～お客さん？ラストオーダーのアップルパイ持って来たんすけど・・・何処置きやしよう？」

店員が困惑するのだって無理は無い。もうテーブルの上には料理を置くためのスペースが食い終わった皿の山で埋め尽くされ、どこにも置き場所が無いのだから。

数秒後、甘いリンゴの香りで目を覚ました男が左手をそっと手人の前に差し出した。男は無言で『このよこせ』と言っているように聞こえ、ご要望通り皿を客の手に手渡した。パイを受け取った男は皿を自分の寝っ転がっている腹の上に乗けて、残された右手でモソモソとパイをつまんだ。

顔を引きつらせた店員は「毎度どうも...」とつぶやくと、三枚分の料理名とその代金を記入した伝票を置いてカウンターの奥へ戻って行った。

「テメェ、ふざけんじゃねえぞコラ！！」

急に店の中で、野太い男の怒声が響き渡った。帽子をずらして騒ぎの中心を探してみると、店の真ん中のテーブルでトラブルが起こったらしい。そこには身長が2mはありそうな巨漢の盗賊団の頭と思しきオヤジと、頭にバンダナを巻いた女が向かい合って座っていた。テーブルの上には数枚の金貨と、一枚の丸まった紙、そしてトランプが並べられてあった。

「テメェ、イカサマしたろ！？ハッキリと俺様の目は見たぞ！！」

「なんだいなんだい！！正当なゲームの場で自分の実力の無さを棚に上げて負けたのを相手のせいにするってのかい！？そんな男にイカサマ呼ばわりされるような筋合いは無いね！！」

どうやらランプで何かカケでもしているようだった。大男は自分が負けたのを女がイカサマをしたせいだと罵っている。

「やかましいわ！！とっととその地図を返しやがれ！！」

「べーっだ！嫌なこったい！」

女は丸まった紙きれを掴むと、テーブルを蹴り倒して男がひっくり返った隙に店を出ようと駆け出した。しかし運が悪いことに、この店唯一の出入り口はあの大男の手下と思われる数人の野郎が先に回り込んで塞がれていた。急いで踵を返して窓から脱出を試みるが、見渡せばこの店にいた全ての手下全員が窓はおろか、カウンターの奥の裏口までガッチリとガードして女の逃げ道を完全に奪い去っている。気が付けば女はすでに囲まれており、完全に孤立無援状態まで昇華されてしまっていた。ただの野党集団と侮っていたが、ここまで連携がとれているとは思わなかったのが最大の誤算だっただろう。

そしてついに、慌てている女の元へさっき転んで後頭部にタンコブの出来たさっきのお頭がノシノシと歩み寄ってきた。

「オイ姉ちゃん、今すぐその地図をこっちに返してくれるんなら、とりあえず命だけは保証してやるぞ」

お頭は最後通告の様に語っているが、こういう場面ではもう完全に教科書通りの発言だ。そんな程度の低い脅しにいちいち屈してはこの世界で一人では生きてゆけない、女はひるむことなく紙切れを強く握ると、また舌を出して「アッカンベー！」っと馬鹿にしてやった。

その瞬間、お頭の堪忍袋の緒が切れた。雄叫びと共に人の頭と同じく体の大きさの拳が女の顔めがけて振り下ろされてきた。相手の実力行使に対して覚悟を決めた女は目をつむって歯を食いしばり、ブッ飛ばされても手放さないように紙を両手でしっかりと握り直した。

パァァァン！！

拳が激突した。しかし当たったのは女の顔でも頭でも、ましてや身体でも無い。

拳がぶつかった先に当たったのは、足の裏だった。ゆっくりと眼を開いてその足の持ち主の正体を確認すると、それは今さっきまでテーブルの上でふんぞり返ってアップルパイをかじっていた、黒い服と帽子を被ったあの男だった。

「・・・え？」

「オイオイおっさんよう、女に手え上げるような奴は最低だって、昔母ちゃんに教わんなかったか？」

男は顔が見えないくらい帽子を深くかぶり直しながら、持ってきた皿に乗っている残りのアップルパイを食っている。

「な、なんだこのガキい！？ふざけんじゃねえぞお！！」

今度は目の前に突如現れた男に標的を変更し、空いているもう片方の拳を振り下ろした。

すると男は今踏んでいる拳を踏み台にしてジャンプすると、空中で一回転しながら隙だらけになっていつ大男の後頭部に回転式踵蹴りをカウンター気味に喰らわせた。悔しくも、踵がぶつかったのはさっきタンコブができた場所とまったく同じだった。大男は眼玉を飛び立たせながらその意外にも強力だった攻撃に店の外までぶっ飛ぶと、顔面を地面に擦りつけて数mの間紅葉おろしを作った後に気絶した。

自分達の仕えているお頭の一大事に慌てふためいた手下共は、急いでお頭を担ぐと一目散に店から逃げて行ってしまった。

その全てを見届ると、男は猫背でのそのそと自分のテーブルに戻って食事の続きを楽しみだした。どうやらさっきまでこの店に入っていた客のほとんどがあの大男の手下だったらしく、店の中はあっという間に数が減って少し寂しい景色になってしまっている。

そのテーブルに、椅子を担いで来たさっきの女が寄ってきて持参した椅子に腰かけ、話しかけてきた。

「さっきはありがとう。あんた結構強いんじゃないか？」

「別に・・・同業者なら仕事してりゃに勝手に体に染み込むもんだろ？」

男は女には目もくれず、ひたすら口の中にパイを詰め込んでいる。テーブルの上の皿を見てもそうだが、この男何やらとんでもなく空腹の様なのだろう。

「それに、人と話す時は最初に自分が名乗るのがマナーじゃねえの、父ちゃんに教わんなかったか？」

「まァそれもそうね。アタシはエル、エル・G・ヴァルキリ―。こう見えてアタシ怪盗やってるの」

「怪盗？」

男はこの街では馴染みの濃い怪盗と言う単語に興味を持った。食べる手が止まり、手に持っていたパイを皿の上に戻してチラリと彼女を帽子の隙間から覗いた。頭の茶色いバンダナ意外気にしてはいなかったのだが、黒いタンクトップの上に赤いチェックのアーミージャケットを羽織り、下半身はゆったりとした青いストレッチパンツ姿。腰には御信用と見られるナイフが鞘に差し込まれてぶら下がっている。しかしこれでは怪盗と呼ぶより、その辺のドロボーか、せいぜい盗賊団の一味ぐらいにしか見えないが・・・そこは突っ込まないで置いた方が後々痛い目にあわなさそうなので口を慎むこととしよう。

「オレはロキって呼ばれてる。ただの盗人だよ」

対してこのロキと名乗る男はエルと比べて対照的と言うか、何と言うか。帽子を脱いだ顔はとりわけカッコいいわけでもなく、髪も瞳も漆黒でまるで整備員が来ているような上下一体型の真っ黒いツナギニブーツ、ファスナーを胸まで開けて中からは白いシャツが顔を出して袖は肘の上まで捲かれて白い裏地が目立っている。

「フ～ン、ロキね。じゃ、改めてありがとう」

エルは改まってロキに深々と頭を下げて礼を言った。怪盗を名乗る犯罪者のくせに、妙にこういう事にしっかりとした女だと感心した。

「そーいや今自分を怪盗って言ってたけど・・・なんか有名な通り名でもあんのか？」

ロキの質問が耳に入り、エルはわざとらしくもったいぶった様にフッフッフと笑った。そしていきなり椅子から立ち上がると、腕組み仁王立ちの姿勢で叫んだ。

「ハーッハッハッハッハ！！よくぞ聞いてくれたねミスター。アタシこそがあの世紀を騒がす大泥棒、不死身の大怪盗、『怪盗アンデット』その人なのだ！アーッハッハッハッハッハ！！」

わざわざ椅子の上で演説するかのようによましく名乗ったまではいいが、まだ残っている客の刺さるような視線がチクチクと刺さって痛くなったので、小さく周りに誤ってから落ち付いて椅子に座り直した。

「・・・ど、どう？アタシの凄さが解ったかしら？」

恥ずかしさを紛らわすようにテーブルをたたき、これまたわざと大声を張り上げた。しかしロキはまるで興味がなさそうで、再びパイをかじっている。

「ん～・・・そこそこ」

「何よそこそこって！？こう見えてもアタシは過去に2度も死んでいるけど、こうして今も生きてんのよ、解る！？」

「悪いけどいちいち自分の人振り返るようなに興味は無えなあ」

パイをかじりながら吐き出されたロキのセリフにエルが引っ掛かったが、急いで前言を訂正、「あんたの人生に興味は無い」と言い直した。

その後しばらく何度か言い直したのか変に感じて尋ねられたが、本人は手と皿についているリンゴソースを丹念に舐め取りながら話をはぐらかし続けた。結局折れたのはつまんなそうに椅子の背もたれに倒れたエルの方だった訳だが・・・。

「ところで、さっきは何でもめてたわけ？」

自分が勝手に助けに入ったとはいえ、こっちは恩人なのだ。喧嘩になった理由はこちらにだって聞く権利は存在しているのは当たり前だ。

「べ〜つに〜・・・」

しかしエルはさっきのロキの真似をして意地悪っぽくそっぽを向いてしまった。

「言わなきゃそれでも良し。つまりはこいつだな？」

振り向くと、ロキの手の中にはポケットの中にしまっておいたはずのさっきの紙切れが握られていた。慌ててポケットを探るがやはりない、いつの間にかエルのポケットからあれをスツたのだろう。

「ちょっ！あんたいつの間に！？返してよ！」

よほど大切な物なのか急いで取り戻そうと身を乗り出すが、エルの腹にはロキの右足が食い込み突っ張り棒の役割を果たして、手を伸ばしても暴れても全く目的の地図に辿り着くことができなかった。それを無視する時は、筒状に丸まった紙きれの包装用のひもをほどき、開封された紙はハラリと開いてその全貌をさらす羽目になってしまった。

そこでロキが目にした物は、古びた文字と絵が書き殴られた、それは「地図」だった。

「ああ・・・バレちゃった」

「へえ、こいつは一等珍しいお宝の地図じゃねえの？つまり、こいつをイカサマして手に入れて反感喰らったってわけだ」

「イカサマなんかしてないし、返しなさいっての！」

奪われた地図を何とか取り戻し、再びひもで結んでから上着の内ポケットの中に仕舞った。そして急にテーブルの上で両支持をつくとそのまま頭を抱えて沈みこんで溜息をつき始めた。出来るだけ秘密にしておきたかったことがこうもあっさりバレてしまっっては、仕方のない事だろうと心中、お察しする。

「ンン・・・はあ、仕方ないっか。OK、助けてもらった借りもあるんだし、もしそのお宝が見つけられたら半分君にあげるよ。それでいいでしょ？」

「商談成立。じゃあさっさと行こうぜ」

二人はお互いの取引の成立の証しとして握手えおかわし、店を後にした。

しかし途中で店長に呼び止められ、飯の代金を払っていないまま食べ逃げされてしまう事を未然に防がれてしまう。

ロキのこの日の食事代は合計23881円也。交渉の末、お宝の半分を4割に減らすことを条件にメシ代をエルに建て替えてもらうこととなった。この日ロキは財布の中身が寂しい状態で、なになドサクサやイザコザが起きた時を見計らって食べ逃げする気満々でドカ喰いをしていたのだが、店長には全て見透かされていたようだ……。

この時のエルの目は、いささか肌が痛く感じた。

野を越え山を二つ超え、お宝の地図を辿って二人がやってきたのは大きな洞窟だった。地図によればこの洞窟の最深部に今回狙っているお宝が眠っているはずなのだ。

草と苔とカビで包まれた洞窟の中に入ると、鼻の奥に向かって思わずむせ返るような強烈な悪臭が駆け巡った。この臭いはおそらく腐臭だろう。この奥では、少なくとも何匹かの動物、あるいは何人かの人間が死んだまま放置されたまま腐り、ウジも湧かないようなひどい有様になっているに違いない。

狭い洞窟の中をしばらく持参してきたランタンの明かりのみで進んでゆくと、案の定意外と近くで白骨化した人間の人体標本が見つかった。仲間割れか、あるいはこの洞窟にあらまじめ仕掛けられていたトラップか何かに引っ掛かったのだろうか、この人体標本はど頭がきれいにかち割れており、ボロボロになった服は全体的に赤黒いシミとその上にカビが生えている。

ある程度予想できていたロキは目の前に発見した落とし物に全く動じることは無かったが、お宝を手に入れることしか頭に無かったエルはこれを見た途端悲鳴を上げ、この先に行けばこんな物がゴロゴロ転がっているぞ、と教えてやるとそれ以降完全にビビってしまいロキの背後にピツタリくっついて離れてはくれなかった。

ロキにしてみれば歩き辛いし骨を見つけるたびにキャーキャー叫んでやかましいし、散々だ。しかし、この先にきっとあるであろうお宝のためだ、もうちょっとだけ頑張ろう。

そんなこんなで、ニブルヘイブを出発し、洞窟に突入して早数時間、時計はもうすぐ夕方の時間を示そうとしている頃合いだ。二人はこの狭っ苦しい洞窟の中を一応快調に問題無く進み続けている。途中で壁から何十本物槍が飛んできて危うく季節外れの昆虫採集標本にされかけたり、天井が落ちてきて二次元世界の住人の仲間入りをしそうになったり、転がる岩に追いかけてまわされた揚句海に繋がる穴に落ちてウツボの大群の餌になりかかったり、見たことの無い謎のおっさんに昨日の晩御飯についてインタビューされたりと、散々な目にあわされた。

その甲斐あって（謎のおっさんはどうでもいいが）、迷路のような洞窟を右へ左へ突き進んでいくうちに、とうとう目的の場所、お宝が眠っていると示されている洞窟の最深部へどうにかこうにか無事生きてたどり着くことに二人は成功した。

お宝の安置場所は、今まで歩いてきた洞窟の中では考えられないような広く、そして見通しの良い場所だった。岩に囲まれたまるでくりぬいたような天然のスタジアムはテニスコート4面分は軽く所有し、天井はぽっかりと穴が開いて沈みかけているお天道様が赤く燃えながら地上を見下ろしているのが見える。そして肝心のお宝はと言えば、そのスタジアムのど真ん中に建てられた小さな神殿の中にドカンと腰をおろして自分の存在を誇示していた。もちろん、今までロキの後ろで半泣きしながら着いて来たエルが真っ先にお宝に反応し、瞳を輝かせながらロキを押し倒し・・・押し倒すどころか踏んづけて神殿へ駈け出して行ってしまった。

「キャー——！！お宝あああ！！」

宝箱に跳び着くなり、エルは瞳を金の色で輝かせながら宝箱に頬摺りをし始めた。お宝が見つかって嬉しいのは解るが、ここまで引っ張ってきてやった相手を足蹴にするのは無くないだろうか？

「お宝お宝——！！ねえねえ、早くこれ持つの手伝ってよう！山分けはその後でねえ！」

「へえへえ・・・今行くっての、全く」

この分だといつは帰りも人のことをこき使う気であるだろう。できるだけそんなことにならないように対策を頭の中で簡単に練りながら、ランタンを足元に置いた。

疲れ切った足に鞭打って歩き出そうとした、まさにその直前だった。ロキの首筋に、よ〜く見慣れた大きなモノが伸びてきて刃が動脈を捉えたところで止まった。

「動くんじゃねえぞ。じゃねえと世界で一番きれいな花見ることになるぜよ？」

「へへへ、御苦労さんでしたね〜っと」

背後から聞き覚えのある品性の欠片も無い汚らしい声が聞こえてきた。さらに今さっき自分達が歩いてきたこのスタジアムの出入り口から、ぞろぞろと同じような声と容姿の男共が列を成して現れた。この男達にはロキもエルも見覚えがある、昼間飯屋でコテンパンにしてやった盗賊団の連中だ。という事は……

「ゲハハハハハハハ！ここまでの道案内とワナの露払い、ありがとよ兄ちゃん」

思った通りこの中で一等下品な笑い声と共に、ロキがボコボコにしてやった盗賊団のお頭がノシノシと歩いてきた。顔と頭には絆創膏と包帯がぐるぐるに巻きつけられて見ているだけでもとても痛々しい有り様だ。

「姉ちゃんもだ、そのお宝は本来俺達が見つかる予定だったお宝なんだ。もしその宝箱を大人しくこっち渡すってんなら命は助けてやらあな」

そんな痛々しい顔で言われたって特に怖くなかった。ドッスンドッスン大きな足音を響かせながら宝箱のある神殿へ近づいて行った。エルはお頭が一步近づいてくる度に、宝箱を抱える力を強くしていく。

「あんたみたいなクマ公に、アタシがせっかく見つけたお宝をみすみす渡してなるもんですかっての！」

見つけたのはオレだっつーの。

「・・・姉ちゃん、周りが見えてねえみたいだなあ？この状態でどの口が言ってんだあ？」

余裕な表情で言い放つお頭に促されて周囲を改めて確認すると、神殿の周りはずでに山賊刀を抜いて下品な顔でニヤニヤしている三下連中で囲まれている。頼みの綱だったロキも掴まっているし、この状態ではこんなにデカイ宝箱を抱えて逃げる切ることのできる可能性は絶望的な数値を示しているに違いない。

「テメェじゃこの数相手にすんのは自殺と同じだ、諦めろって！」

首に刀をあてがわれたままのロキが、エルに向けて大声で叫んだ。確かにロキの言う通りだ、この数では、到底敵う筈が無いことは自分がよく知っている。

とうとうエルが折れた。項垂れる様に頭が下がり、高さんの印として両手を上げて宝箱からゆっくりと離れた。

宝箱がフリーになったとたん、周りを取り囲んでいた連中が死肉を見つけたハイエナのように一斉に群がり始めた。宝箱を数人がかりで担ぎ、簡単に神殿の外まで運び出してしまった。これから自分達のアジトまで持って帰り、それから中身を確認する算段だろう。

「ヨッシャヨッシャ。姉ちゃんは素直に言う事を聞いてくれたんだ、命の保証は確かにしてやるよ。」

目当てのお宝が手に入って上機嫌になったお頭が、いやらしく笑いながらノシノシと無気力状態のまま連れてこられたエルの前へ立ちはだかった。

「ただし！この俺からっ地図をかつぱらった罪は償う必要がある。あんたは俺達と一緒に来てもらうぜ！」

突然お頭の形相が一変し、叫び上げるのと同時に手下の一人がエルの身体を縄で締め上げ、完全に身体を自由を奪ってしまった。エルはこれ以上なんの抵抗もできる元気も無く、正されるがままにこうべを垂れて盗賊どもの後をついて行くように足を動かした。はたから見ればその様子は、人身売買で商っている悪徳業者とその売り物の様な光景だった。ロキはその姿を不満そうな顔で見送った。

そして今度はお頭がロキの前まで歩いてきて、目の前で立ち止まり文字どおり上から目線でロキを見下ろした。

「・・・なんか用かよ？」

ロキはあえて生意気そうな口ぶりで尋ねると、ロキを脅していた剣を自分の手下からブンン取って切っ先を眉間に向けた。この時こいつの目は、とても血走っている。

「テメエには恨みがあったなあ……。この顔、まだずいぶんと痛む上に歯が一本抜け落ちちゃったんだぞ？」

「ふ～ん……。それで？」

この期に及んでまだ生意気な口ぶりで挑発している。葉が何本抜け落ちようが知ったこっちゃないのは当然だが、この状況でこの態度は自殺に等しかった。

この瞬間、お頭の細い頭の血管がブチ切れた。

ズシャアア！！

あれから時間が経ち、辺りはすっかり暗くなってしまった。持ってきたランタンはオイルが切れて明かりが消えてしまい、地上を照らすのは雲の上で静かに輝く月の光のみだ。スタジアムの中央には大量の血だまりとその真ん中に全身串刺し状態で死んだロキの死体が転がっている。死体の周囲には死臭を嗅ぎつけてハエもたかっている。死体は月光に映し出され、体外へ流れ落ちた血液が赤黒く反射して光っている。

ドクン

ドクン

ドクン

ドクン・・・ ドクン・・・ ドクン・・・ ドクン・・・

死体の心臓が小さく、しかし力強く、確実に振動した。残り数ない体内の血液が心臓の鼓動により体内で水流を作る。

わずかに、指先がピクリと動いた。

やがてゆっくりと5本の指が動きだし、拳が地面の砂を握った。

とうとう腕が上がり、肘をついて体を起こそうとした。四つん這いの姿勢からゆっくりと起き上がり、血塊を吐きだした。

口の周りを血で汚しはしたが、その口元は確かに笑っていた。

盗賊どもの味とは、宝赤くされていた洞窟の手前にある山の中腹、洞穴の様な所に手を加えて住みやすくなるように加工して全員ここで騒いでいる。

この狭苦しい空間で、盗賊どもは酒と食いものを持ち寄ってドンチャン騒ぎの真っ最中だ。お頭はこの洞穴の一番奥で岩の上に腰かけ、樽酒をカッ喰らっている。その後ろにはさっき横取りした（本人に言わせれば取り戻した）宝箱と、籠の鳥のように檻の中に閉じ込められたエルがいた。縄を解いてくれと騒いでうるさかったため、慎重に会議を繰り返して妥協に妥協を重ねた結果、今この状況となっていると言う訳なのだ。

「ガッハッハッハッハッハ！！今日も大量大量、もっと酒持って来〜い！」

お頭は宝箱の中にガッポリ詰まっていた古い金貨を見てとても上機嫌だった。これを売り捌けば軽く1000万Lは下らないだろう。酒で赤く染まった顔を恵比寿に似せながら、骨のついた肉をかぶりつく。体格相応にものすごい食べっぷりだとエルは感心した。その代わりエルは何も口にするのを許されておらず、空きっ腹を抱えてただ呆然と暴飲暴食を繰り返す盗賊どもの宴会をジ〜っと眺めることしかできなかった。

香ばしい肉の香りを嗅ぐと、腹の虫が悲鳴を上げた。

「・・・ねえ、でっかい人」

「なんだ姉ちゃん？」

「アタシこれからどうなんのさ？」

エルが今抱えている問題は二つ。一つは今言った空腹、夕餉の時刻はすでに過ぎておりいい加減目が回ってきている。

そして二つ目が、これからの自分の処遇に関してだ。罰を与えると言ってここまで連れてこられたが、こいつらの頭では一体これから自分が何をされるのやら見当もつかない。改めてここで確認を入れておいた方が得策だろう。うまくいけばここから逃げるチャンスもあるかもしれない。

「そうだなあ・・・。まア殺しはしねえってのが約束だ、傷は付けさせねえ。そんかし明日にでも娼婦小屋にでも連れてって、姉ちゃんはその場で男達のために毎日昼も夜も腰振ってもらう事になるかな。儲けた金は、ほとんど俺達の懐ってのが今んとこの計画だ」

お頭が肉をクチャクチャと咀嚼しながらそう言うと、エルは少し安心したように胸を撫で下ろした。もし本当にそうするのだとしたら、売り飛ばされる前に逃げ出すチャンスはいくらでもある。行動は明日の朝に決まった。

「ただし・・・そんなんじゃ俺から地図を盗んだ罪は消えないぜ！」

檻の中でクスクス笑っているエルを睨みつけて大声で叫ぶと、お頭は食い終わった肉の骨を振りかざし、檻を施錠している錠前をいとも簡単にたたき壊した。そしてそのまま檻を開くと、中にいたエルを大きな腕で掴むとゴミを捨てるようにポイツと反対側の壁まで放り投げた。着地に失敗したエルは尻もちをつき、余程痛かったのか尻をさすった。

「痛いでしょう、なにすんのよ!？」

「オイタした罰だよ。オイ野郎ども、この女今晚だけ好きに食っていいぞ。売りもんだからな、傷つけたら承知しねえからな気をつけるよ！」

「「ヘーイ!!」」×十数人

直後、盗賊の下っ端連中の目が変わり、全員がこっちを向いた。目と眼が重なったとたん、エルは本能的に身の危険を感じ身の毛がよだった。腹はいっぱいになったが、別も所がいっぱいになっている飢えた臭い男共が、ジリジリと倒れているエルへ近づいてゆく。一体こいつらが何を考えているのか、最初は解らなかったがその答えはいつしか、「わかりたくない」に変わって行くのが解った。

まあようするに・・・そういうことだろう。一人の女に対して十何人の男が全員、エルの足腰が言う事を聞かなくなるまで・・・てところだ。

一番手前の男がゲヘゲへと気色の悪い下品な笑いと共に、ワキワキと指をいやらしく動かしながら迫ってきた。

「ちょっと、マジ勘弁してよ!？アタシそういうのはまだ・・・ダメなの!!カンベンしてよ!!」

エルはボロボロ涙をこぼしながら今さらになって許しを請うた。しかし誰一人エルの言葉は耳に入らず、むしろ初めてと理解した数人の男がヨダレを垂らしながら目を血走らせてズンズン近づいてくる。

「いいいいいいやあああああああああ!!!!!!」

逃げ場を失ったエルの肌に、食いもので汚れた指が触れる・・・

その時・・・

ギャン！！ ドサッ！

エルの顔面スレスレを、何かが高速で通り過ぎるのと同時に、足元に何か落ちるような音が洞穴の中で響いた。エルに一番で触れようとした男が足元を確認すると、そこには手首が落ちていた。よく知っている、見覚えのある手だ。なぜならそれは、自分の手首なのだから。

「痛ってえええええ！！！」

時間差でようやく痛覚が脳に置くされたたん、手首からおびただしい量の血が噴水のように噴出した。傷口を掴み、激痛の余り地面に倒れて転がりまわった。

さらに壁を見ると、エルの頭の横に一本の山賊刀が岩肌に突き刺さって揺れていた。この刀が手首を切断した犯人の様で、刀身の全体が血で赤く染まっていた。

「誰だ、そこに居やがるのは！？」

危機を察知したお頭が燃えている松明の一本を掴みとり、剣を投げたであろう犯人のいる出入口へ投げ飛ばした。松明は思ったよりあまり飛ばず、入口よりのずっと手前で転がり、パチパチと火花を散らしながら燃え続ける。そして炎の明かりは、確かに犯人の姿を照らしてくれた。その犯人を目の当たりにした時、視線を向けた物全員が顔面蒼白となって数歩後ろへ引き下がった。

その男は、血にまみれていた。血がベツトリと付着した刀の先からは別の血が滴り落ち、黒いブーツは己の血でできた赤い足跡を残している

わずかな炎が照らし出した男の顔は・・・ロキだった。

「ッ！小僧だと！？」

「ウソ！！何で生きてんの！！？」

ロキは二人の声を聞き流し、周囲を軽く見回してニヤリと口元を歪めると、ゆっくりとした歩調で前進した。ベチャベチャと、液体を踏むような足音を鳴らしながら歩き続けると、やがて闇に隠されていたロキの全貌が、松明の明かりで照らし出されてきた。

その姿が鮮明にされた途端、誰かが思わず悲鳴を上げたのが聞こえ、激しくどよめいた。

ハデスの身体には、乾いて固まった血とまだ濡れている血、全身に砂と泥、そして・・・体中に突き刺さった5本の刀達。刀は未だにロキの身体を貫き続け、切っ先からは新鮮な血液がポタポタと滴っている。一歩歩く度に傷口から血が飛び出し、足元に小さな血だまりを作ってその上をブーツが踏みしめている。

コイツは殺したはず・・・確かに昼間、あの神殿の前で串刺しにして殺したはずなんだ。

なのに・・・だと言うのに・・・何でこいつがこんな所にいるんだ！！？

衝撃的過ぎる光景を目撃したエルは言葉を失い、お頭は酒ダルを落としてうろたえた。

「こ、小僧！！テメエは・・・テメエは一体何者なんだ！？」

戸惑いを隠すことができず、お頭は言葉を詰まらせながら思いきって聞きだした。ロキは待ってましたとばかりに顔をニヤけ、ここでとうとう自己紹介を始めた。

「・・・・・・・・不死者」

「何？」

「不死身の『大怪盗アンデット』 オレの名は『ハデス・ロキ』だと言え、どうする？」

その不吉な名前が発せられた瞬間、松明炎が一瞬激しく燃え上がり、ロキの瞳をまさに血のように赤く染め上げ全員を睨みつけた。

エルは信じがたい真実に頭の中が混乱した。あの時飯屋で飯をたらふく平らげていたあのフザケた男が、あの伝説に名高い「怪盗アンデット」だったなんて。血の引いたような白い表情を両手で王位隠し両目を見開いてロキの姿をもう一度見直した。普通の人間ならとっくに死んでいておかしくない複数の傷、致死量をはるかに上回る出血、真実を聞かされた以上、この光景は本物であり、本当の現実なのだとようやく理解した。

「クソっ、アンデットだろうが構うな！！野郎共、二度と生きてこれないように細切れにしまえ！！」

さすがに躊躇いを見せたお頭だったが、大声を上げることで自分の根性と手下共に激を飛ばすと、一斉に刀を抜いてロキへめがけて刃を振るった。

「凝りないねえ・・・あんだ達は、死んだことはあるかな？」

ロキはその場から一步も引くこと無く静かに呟き、またニヤリと笑った。

体中に突き刺さったままだった刀を全部ひっこ抜くと、懐へ両手を突っ込み黒い物体を抜き取ると、その先端を一番先頭にいる手下Aへ向けた。

直後、ガァンッ！！ガァンッ！！と耳を突く様な鋭い大きな音が洞窟の中いっばいに反響し、とたん数人の手下がいきなり顔面や喉から血を噴き出してブツ倒れてしまった。全員の足が急にピタリと止まり、倒れた同士とロキが手にしているその黒い物体を交互に見比べた。

ロキが両手に握っているのは、「黒い鉄の塊」・・・としか今は表現することができなかった。何せ見たことの無い物を持っているのだから。細長い長兄の鉄に握りやすくてきた取っ手と、先端には穴が空いて煙が吹いている。そして足元には小さな金属の筒が複数、これまた煙を上げて転がっていた。全く知らない謎の武器に、全員が再びどよめきだした。

「一体・・・そりゃ何なんだ？」

「ん？・・・そうか、この辺じゃまだお目にかかれてないっけか？」

ロキは取っ先の先についている小さな輪っかに指を通すと、弄ぶようにそれをクルクルと回しながら語った。

「前時代、これは『銃』って呼ばれていた携帯兵器でね、通称『プロメテウス』と『イフリート』って呼んでいた今となっちゃ骨董品さ。使用弾12mm鉄鋼弾、装弾数20発、秒速340mで迫りくる亜高速の死神からは、絶対に逃れることはできない」

簡単な説明と脅しを終えたロキは早速銃口を目の前にいる連中に向け直すと、何の迷いもなくトリガーを引いた。発射された弾丸は正確に手下共の頭や心臓など、人体の急所を打ち抜き洞窟中に恐怖と絶望の悲鳴が木霊した。洞窟全体が先決で染められてゆく様を、エルは完全に腰が抜けてしまい床に倒れてただじっと恐怖を浮かべ名が経見続けた。その圧倒的な恐怖からか、飛んできた返り血が頭から被っても全く気がつくことは無く、ガタガタと隅っこで震えていることしかできないでいる。

あれだけ大勢いたはずの盗賊どもは、ロキの残虐な行為のおかげで物の二分程度で全員服を着たひき肉に変わってしまった。足元に転がるのは湖の様な血溜まり、と眼玉を失ってしまった死体や頭が碎けて中身がズル剥けになっている死体。壁と天井には悪趣味は血のペインティングアートでベトリ。とっておきのBGMはまだギリギリ生きていた手下の呻き声と断末魔、そして死を訴えるかすかな悲鳴。

死屍累々、地獄とはこの場所のことを言うのだ。

屍の山の上にそびえ立っているロキは、さながら悪魔か死神か・・・それとも口では表現しきれないような、もっと恐ろしい何かなのか・・・。

「・・・今回で35回目だ」

空になったマガジンを交換しながら、突然ロキは口を開いて語りだした。

「今までマップの連中に首刎ねられた以外に、オレは34回死んだことがある」

いながらゆっくりとした歩調で歩きだした、足元に落ちている死体を木の葉の様に踏みしめながら。まだ息があり、死にたくないとわずかな声で訴える手下をゴミを見る目で見下しつつ、まだ繋がっている首を踏みしめ全体重を付加させると・・・

ギギギギ・・・ゴキッ

小枝が折れるように、いとも容易く砕けた。

死体の肉がつぶれる音、断末魔の叫び、血の海を踏みしめて歩く音、骨が砕ける悲鳴、一步一步確かに踏みしめながら、完全に腰が砕けて立つこともできなくなったお頭の下までやってきた。

「外国では車に潰されたり、マフィアに銃撃戦の撒き浴いにあって脳ミソぶち撒けたこともあるし、そう言えば航空爆撃の被害にもあって下半身が粉々に吹っ飛んだこともあるなあ。宗教裁判にも強制連行されて、磔刑の上に火炙りにされた時はさすがに終わったかと思ったよ」

今話しているのは、怪盗アンデットが殺された歴史、つまり自分が死んだ記憶の様だ。300年近く生き続けているうちに死んだ回数が35回、通常の人間の人生から考えればこの数は異常極まりない。その死んだ歴史こそが、怪盗アンデット本人と確証付ける何よりの証拠なのだ。

「知ってるか？人ってのは死ぬ瞬間、実は痛みが消えてしまうもんなんだよ。死ぬってことを楽になるって表現がここまで正しいとは俺だって知らなかったね。身体が一瞬ポワッと軽くなつてな、そんでもって気が付いたら足元に自分が横たわってんの。たぶんあれが魂からの目先ってヤツなんだろうよ？」

また一人足蹴にすると、弾痕から潰されたトマトの様に勢いよく血と内臓が噴射し、お頭の顔とロキの下半身を赤く染め上げた。

「魂ってのはなあ、キラキラ光ってて結構綺麗なんだよ。そんで死んだ魂はそのままフワフワ空飛んでいくのに、オレだけ飛べないでまた傷だらけの身体に帰っちゃうんだ」

お頭の手が伸ばせば届くくらいの位置まで近づくと、おもむろに銃を片方お頭の口の中に捻じ込んだ。お頭は涙を流し、まるで金縛りになった様に身体が動かすことができないでガタガタ震え、呼吸も満足にできない状況まで陥っていた。

ロキは自分の歯肉を剥き出しにして笑うと、瞳孔の開いた瞳で睨んだ。

「もう一度聞いてやる・・・あんたは、死んだことがあるかい？」

「ヒィ・・・いいい・・・い・・・命だけは、助けてください・・・お願いします・・・」

お頭は全身がマッサージ機のように震えながら、とうとう命乞いを始めた。生に縋ろうとする人間の姿ときたら、なんて醜いことだろうか・・・いつもこの光景を目にする度にそう思えて仕方がない。

しばらく怯えるお頭の様子をうかがうと、瞳が元に戻った頃に銃を口から離した。死の緊張から解放されると、口中に広がる鉄の味と激しい吐き気やらでゲホゲホとしばらくの間咳き込んだ。

「見逃してもいいが・・・条件がある」

「ガハ、ゲハゲハ・・・な、何也と」

「怪盗アンデットとして欲しい物が二つ。一つはオタクが横取りしたお宝全部だ」

「へ、へい、仰せのままに！」

お頭は足をもつれさせながらフラフラと立ち上がると、床に散らばった金貨を一枚残さず宝箱に仕舞い、ついでに今まで手に入れてきた自分のお宝と一緒にここまでの運搬に使った大きな荷車に乗せてロープで急いで固定し、ロキへ差し出した。

「ゼエ、ゼエ、ゼエ・・・荷づくり、完了しました・・・どうぞ、お納め下さい」

「ん・・・そしてもう一つ、売り物扱いで連れてきた俺のつれ、エル・G・ヴァルキリーの解放」

「仰せのままに・・・！」

お頭は息を整える暇さえ与えられないままエルの元まで走らされると、両手で優しく持ち上げてそっと荷車にお人形遊びをするように座られた。ついでにポケットから清潔なハンカチを取り出し、顔についた返り血や土ぼこりをポンポンと丁寧に払ってやった。ここまでやらされた時には、もう息なんかできないくらい疲れ切っている。

「ヒュー、ヒュー・・・こんなもんで・・・どがんしょ？」

「上出来だ。そんじゃ帰るとするか・・・エル、落ちないようにしっかりつかまってるよ」

「え・・・ああ・・・うん」

混乱している頭で、これ以上ロキにかけられる返事は無かった。銃をホルスターに仕舞うと荷車を渾身の力で引きながらロキはこの洞窟を後にした。途中邪魔な死体を安心しきった顔で見送ろうとしているお頭にどけさせながらようやく外まで連れ出すと、お頭は全身の緊張の糸が一気に切れて、ようやく息を整えられる時間ができて肩を落とした。

「あ、そうだ忘れてたわ！」

少し離れてきたところで、また急にロキが大声をわざとらしく張り上げた。荷車をその場に置き、スタスタと膝をついて倒れているお頭の元まで急いで戻って来た。

「こ、今度は何でしょうか旦那？」

「ん、これ忘れてたんだ」

ロキは袖の中からトランプくらいの大サイズの黒いプラスチックカードを取り出し、反対の袖の中から取り出した赤ペンで文字を書きなぐった。

数秒で作業が終了すると、今度はそのカードをお頭に投げ渡した。

「あの・・・こいつは？」

「読んでみろ」

お頭はもう逆らう事を完全にやめ、大人しくカードに書かれた赤い文字を読み上げた。カードには、こう書かれていた。

「予告状 本日明朝、朝日が赤き大地を照らしし時、貴殿の生命をいただきに参上する from 怪盗アンデット」

文章を読み終わったとたん、ロキは銃を抜いて今度はお頭の額に銃口をあてがった。訳が解らなくなり、頭の中がパニック状態になり始める。

「ちょ、ちょちょとっと待ってくれ！！い、命は助けてくれる約束じゃなかったんですか！！??」

「・・・オレがテメエ程度の糞っカス相手に、約束なんか守るわけねえだろ？オメエみたいなのが大っ嫌いでしょう、腹が立って仕方無かったんだ」

その時、運命のカウントダウンが終わりを告げるように、ロキの背後から朝日が昇って来た。血で濡れた大地を赤黒く照らし、太陽の逆光でロキの顔が見えなくなった。

「時は来た。その腐った命、貰い受けよう」

お頭は最後に「助けて！」の言葉も発せられないまま、トリガーが引かれて脳天に3つの穴が穿った。白目をむいて倒れるお頭の傷口から噴水の様な血が噴出し、ロキの顔面を赤くベツリと濡らした。

「・・・確かにいただいた。これは領収書だ、取っときな」

振り返りながらまた一枚カードを抜き取り、それを背中越しに倒れているお頭の腹の上に刺した。
カードには黒いマントを纏った死神が一言、「頂きました」とつぶやいていた。

「あ～あ、せっかく卸したてのおニューだったのに、あっという間にボロボロかよ……。」

ロキは荷車を引きながら、今さらになって自分のナリについてブツクサ不満を言い出した。突き刺さった刀で服は穴だらけ、おまけに自分の所した奴らの返り血べ真っ赤かのベットベトと来たもんだ。とてもじゃないがもう着れた物じゃない。

「結構気に入ってたんだけどなあ……どうせ安物だけど。血も固まっちゃまってシミになあってるし、こりゃクリーニングも受け取り拒否だな……なあエル、悪いんだけど街に着いたらオレの代わりに服買ってきてくれねえか？」

荷車の後ろ、ロキとはちょうど反対側に座っていたエルに声をかけるが、エルはさっきからボーっとしているばかりで声が耳に入っていない様子だった。おった足を両腕で抱いて、じっと朝日を拝んでいる。

見かねたロキが荷車を揺らしつつ今度はもっと大声で呼ぶとようやく返事をしてくれたが、顔を合わせても目線が泳いでちっとも目を見てくれない。その表情にはまだ不信感と、かすかな恐怖心が恐怖の色が伺える。助けてもらって置いて何なんだが……やっぱりどうしても怖いのだ。あの大量殺戮の光景と、全身を血に染めて現れたロキをいきなり目の当たりにしたんだ……それも当然と言えば当然だろう。

「あのよう、さっきも言ったんだけども街に着いたらオレの服買ってきて欲しいんだ」

「ああ、わかった……構わない」

エルは小さな声で曖昧な返事を返すと、また目を背けて朝日を眺め出した。いっちゃ悪いかもしれないが、そんなに太陽ばかり見てて楽しいのか？

ロキはボロボロ頭をかきむしりながらため息をつく、仕方なく荷車を引く手を止めた。突然荷車が止まったもんだから、何か起こったのかと思って振り向くとそこにはロキが経っていて、何も言わずにエルの隣に腰を落とした。改めてロキの身体を見てみれば、あれだけ突き刺さっていた傷は全て塞がっており、出血ももう止まっていた。微かに恐怖と不気味さが胸の奥から湧き上がり、少しだけロキから身を話してしまった。

「・・・やっぱおっかねえか、オレのこと？」

「え・・・。いや、そんな事は・・・」

「無理すんなくて・・・当たり前だよなあ、目の前で死んだはずの人間がこんなクソ重たい荷車気張って引いて、こうやって朝日拝みながら呑気におしゃべりしてるんだからなあ」

あからさまに怖がっているエルに対しワザとふざけた様にヘラヘラしながら話しているが、その笑顔は無理をしているような作った笑顔でなんだか寂しそうに見えた。よっぽど無理をしているのは自分ではなく、ロキ本人なのだろう。

「・・・何でなの？」

「何が？」

「あんた・・・何でそんな身体になったのさ？」

未だに目を合わせてはくれないが、ようやくまともに口を開いてくれたと思ったら・・・やっぱりその話か。

太陽が昇って気温が上がり、熱くなったのでツナギの上着を脱ぎ腰で結んだ。下着に来ていた白いTシャツはすっかり赤黒いグロテスクな色で染まってしまっている。

「・・・こんなアホみたいな身体と巡り合ったのは、オレがまだ15の時だった」

エルの視線はゆっくりとロキまで移動し、今度はロキの方が朝日を見つめる番になった。ロキは、どこまでも果てしない光景を見尽くせるくらいな遠い目で語った。

1323年 当時「トリックスター」を名乗っていたハデス・ロキは15歳。この時からすでに悪さを初めており、この日もある研究施設から興味深い資料と地図を盗み出すことに成功した。その地図にはとんでもないお宝が記されていた。一口飲むだけで、ジン縫いにとって永遠の憧れでもある『永遠の命』という物が手に入るお宝、「フェニックスの血」。それが今回のロキの目標だった。資料によるとそのお宝は紀元前より昔、とある狩人が偶然目の前を飛んでいた不死鳥を仕留めて手に入れた血を保管しているらしい。その在処に関しては全くの不明だったが、つい最近になって研究が進み、その在処と成り得る可能性が高い場所を突き止めることができた。本来その地は軍事目的で研究解明するつもりだったのだろうが、それを飲むだけで永遠の命、不老不死が手に入ると知ったロキは若さゆえの即断即決で地図を盗み出し、お宝を横取りしようと計画した。

それから数日間探しまわると、地図で示された場所は森の奥深くの小さな祠があった。その祠を調べると、中から目的のお宝、フェニックスの血が確かに存在していた。鉛筆一本分程の小さな小瓶に満たされた燃えるように赤い液体は、まさしく本物だったのだ。

「・・・で、飲んだってわけ？」

「ああ、興味本位でな。あの時は俺も本当に馬鹿だったぜ・・・」

昔の自分の行いを思い出しわずかに笑みを浮かべたが、すぐにその顔は沈み哀愁の漂う悲しい笑みへ変わった。

「飲んだ結果がこのざまだ・・・永遠の命なんて、呪いと同じさね」

「嬉しくなかったの？」

「最初はバカみたいに喜んだよ。その場で自分の指切り落としても、すぐくっついたからな。手の平に穴開けてもすぐ塞がる。どんな病気にもかからねえ。夢の様だったさ・・・けどな、それに比例して失う物だって大き過ぎた」

朝日を見つめるロキの瞳がかすかに光った。涙がこぼれ、光が反射しているのだ。

「死にたくても死ねないってのは辛いぜ？自殺だって出来ないし、ようやく土の中に埋まってこれならやっと眠れると思ったら体が勝手に反応して、外まで這い出ようとしやがる。周りの人間が死んでもオレだけみんなの後へ続けない、オレだけが死ねない。どんなに大切にしてきた仲間がたって、オレだけ残してバツバツ死んでしまう」

エルには見られない様に涙をぬぐうと、今度はいきなり真剣な表情になってエルの目を見つめた。

「いいか、『永遠の命』ってのはその代償として『永久の孤独と永遠の寂しさ』ってモンを背負うことになるんだ。こんな思いをするのはこの世にオレ一人で十分だ。周りの連中がどんだけ騒いで不老不死を望もうがお前は賛同しちゃならねえ。命尽きてこそ、人間の性分ってものなんだ」

エルの両肩をしっかりと掴み、「いいな？」と一言確認し、エルも真剣に首を縦に振った。人間誰も死ぬのは嫌だし、死ぬのは怖い。だけど、死ぬことができないのはもっと恐ろしい。自分の命が永遠に肉体の牢獄に閉じ込められ、いくら臨もうが永久に外の光を拝むことができないのだ。人生の最後、牢獄から解放されて眩しい光を見ることができてこそ、それが本当の『生命』と呼べるものなんだ。それを、ロキが教えてくれた。

両肩から手が離れると、あの時飯屋で見せた無邪気な笑顔が浮かんだ。こうして笑っている顔をいけば、もう怖くなんかない。いくら化物と呼ばれようが、アンデットと呼ばれようが、今のこの姿は紛れもなく「人間」なのだから。

「ようし、じゃあさっさと街に戻ってメシ喰うぞ。いちいち生き返ると急激に腹が減るんだよこの体は」

緊張感が解けてそう話すと、それを確証付けるかのように最高のタイミングで腹の虫が派手に悲鳴を上げた。荷車を飛び降り、再び力強く引き走った。さっきよりもスピードが増し、朝の冷たい空気が風になってエルの顔を打ちつけた。荷物越しに振り向くと、楽しそうな顔で荷車を引っ張るロキがいた。その姿を見て、エルもかすかに笑顔を取り戻すことができた。不覚にも、ちょっとだけカッコイイと思ってしまった。

「よっしゃあ！！ニブル Heim まで向かって全速前進じゃあコラア！！」

エルは宝箱の上へよじ登ると、まるで親分にでもなった気持ちで勇ましく叫び出した。もう自分が女だと言う事を忘れてしまいそうになるくらい、豪快な掛け声だった。

「そう言えばさ、新しい服はどんなのが着たいわけ？」

「黒い服。できれば今と同じの！」

「ダメに決まってんだろ！今どき黒一色のツナギなんて流行らないよ？」

「ウルヘー！！このルックスが、怪盗アンデットの基本スタイルなんだよ！デフォルメなの！」

「なるほどなあ、長生きしてる分センスが古いんだな、激　ダ　サ　～！！」

「んだとこのクソ女！男女！！オナベ！！ビッチ！！足手まとい！！」

「殺すぞこのクソ野郎！！」

「どうせ死にませんよ～っだバーカ！」

「ゼッターいつか殺してやるから覚悟しろよコラア！！」

終わり

一言

深夜しか描く余裕が無くて非常に疲れました

学生の頃にした短編と引っ張り出して書きたくなったのでパッチ当てて描き下ろしたら、こんなに時間かかっちゃいました

今まで書いてきた中では、個人的に一番血身ドロ率の激しい内容になってしまいました

このサイトにはこういう情景の作品が少なかったので自分の作品が浮いてしまうのではないかと内心心配ではございますがありません

皆殺しの時に説明していた「装弾数20発」は、グリップを太くダブルカーラム仕様ってことで理解して下さいと嬉しいです

皆さん読んでくれるとありがたいです

コメントも欲しいなあ